と葉隱武士たるものに戒めてある。此の戒は現代人の生活にとつてます〳〵切實なものである。固り之は決して實業を輕視するといふのではなく、經濟道德を述べたものであつて、金錢は無用だ、實業は必要でない、重視するには及ばぬといふことではない。而るに經濟觀念の不徹底は縣民性の短所ともなつてをり、そのためか軍人、政治家には偉大な人々を輩出して居りながら實業界は比較的寂寥の感を禁じ得ない。

今や我國は戰時体制下にあり、擧國一致此の國難打開を目指して躍進しつゝあるのであるが、國防上、國民生活上、國家運用上、經濟活動の樞要なることは今更贅言を要しないことではあるが、我國の經濟狀態をみるに、天然資源に於ては列强國に劣ること甚しく、且つその上我國は一億になん〳〵とする大人口を有し、人口密度は頗る大である。この大人口を養ふためにも、戰時軍需品工業の發展にも大いに經濟活動の進展を期せねばならない。よろしく經濟的自覺により各自の家庭經濟の發展向上、改善を計るとともに天然資源を滿洲、北支等の海外に求め、以つて我國產業の發展、國防の充實に資すべきである。斯くてこそ始めて經濟的苦惱より脫却して圓滑なる國策運用がなされるものと思ふ。此處に本縣出身財界を瞥見すれば

藤山雷太　從五位勳三等貴族院議員、文久三年に生る、現に大日本製糖、三井信託、日本染料製造帝國劇場、第三銀行を始め二十七の銀行會社の社長、重役を勤めて現今財界の大立物である。

木下新三郎　台灣の澁澤子と稱せられて全島を風靡してゐる。東京帝大政治科に入るも中途にして商家の子弟教育を志して退學し、資なく遂に「新商人」と云ふ小說を出版し、その利を以つて東京商業學校を創立し、後渡台して台灣建築物株式會社々長を始め十數社の長として重きをなしてゐる。

村井五郎　早大商科卒業後その俊才を愛されて、實業界の大建物村井吉兵衞氏の女婿となる。今や同校出身者中の新進實業家として前途を祝福されてゐる。現に太平洋生命、日章火災、海上兩保險、日本モスリン各會社の重役である。

天野爲之　我が經濟界の泰斗。東洋經濟新報を創刊經營し、現にその社長、早稻田實業學校長の職にある。

松尾廣吉　伊萬里町出身。松尾工場を設立し、主に專賣特許堀式蛇管接手、堀式消防蒸氣喞筒、同水道消化栓、和田式耐寒共用栓、同耐寒給水等を製作してゐる。後多額納稅者として貴族院議員に當選された。

會根達藏　我が建築界の恩人である。帝大助敎授。工學博士、吳、佐世保軍港築港委員を歷任し、三菱會社の顧問となり、次いで臨時議院建築局常務顧問に任じ、現に會根中條建築事務所を經營してゐる。

古賀春一　東京高商卒業。始め銀行界に入り後各種の實業界に入りて辛酸をなめ、遂に大成して、

現に大日本炭坑會社々長外數十の諸會社の重役である。

大倉邦彦　神埼郡西郷村出身、東亞同文書院商務科卒業後、大文洋行上海支店に入り、次いで大阪支店に轉じ、現時養父の後をうけて大倉事業の全般を主宰してゐる。大倉洋紙店、小田原製紙會社々長、大文洋行、小倉製紙、東京金鋼等の重役である。又大倉精神文化研究所の所長であり設立者であつて、今回郷土に春日山修養道場を寄附す。

森永太一郎　森永製菓の社長。明治二十二年渡米して菓子製造所の職工となり、その製造法を習得し、歸朝後、洋菓子製造開業、次いで株式組織となり今日の隆盛を致した。

福岡清一郎　工部大學卒業後各地方の縣の土木工事調査等に從ひ、次いで四高教授、吳鎭守府に歴任し、その外大連水道管理、鑑船、鐵道、軍隊に給水して功を立て、後横濱の外人の經營する土木會社をうけついで現今の隆盛を來した。

田中鐵三郎　鹿島町出身、前日銀理事にして現在、滿洲國銀行總裁にして滿洲國金融界の總元締として、建設途上の滿洲國に大きな役割を演じつゝある。

古賀武四郎　海軍經理學校卒業後、日清日露の兩役に從軍、戰後實業界に進み、東京農工銀行新宿支店長として令名を謳はれた。

岡田時太郎　攻玉社の土木建築科を卒業、辰野博士に從ひて歐洲に銀行建築調査をなし、歸りて大連にて土木建築業に從事し、後東京にて岡田工所務を設けて發展した。

戸上信文　戸上電機の社長。大正八年戸上式自動配電裝置その他、幾多の發明をなし、日本及諸外國の特許を得、次いで大正十四年現地に工場建築移店し、昭和四年より徒弟養成開始、今や五十有餘の特許又は實用新案權を有して好評嘖々、戸上電機の名は全國苟も電氣を知るものに徹底した盛名であり、氏の天才的研究と獨創力の豊富とは我が電機界に多大なる功績を與へ、その將來を大いに期待されてゐる。

江崎利一　菓子といへばグリコ、グリコト云へば「一粒三百米」の標語を思ひ出す、それほどグリコと云へば菓子界、否現代の子供の世界にはなくてはならない榮養菓子として普く人口に膾炙されてゐる。このグリコの御本尊が我が佐賀出身の葉隱人士であり、しかもその原料となるものが、冬季味覺の王者として尊ばれる有明海の牡蠣の煮汁を原料としたものであること、即ち人及物産とが葉隱の息をついてゐるものであることを思ふときに、氏の今日の事業を賞讃してやまないものがある。氏は現在大阪在住で今述べたグリコ製菓會社々長であり、大阪の滿洲國名譽領事である。このグリコを案出したのも、牡蠣の廢物利用といふことのみを考へてゐた所、近所の子供が鎭守の森で走りつこをしてゐる姿を見るともなしに見てゐるとき靈感に、子供—健康—走る—、ことの上に一粒三百米の標語と菓子製造とを思ひついたと云つてゐる。然もその原料たるや、純然たる廢物を利用したものであることを思ふとき、發明發見の材料が如何に我々身邊にあるものであ

るかといふ力强さを受けると共に、我が葉隱人士中の變り種として氏の今日を祝福すると共に滿腔の敬意を表すものである。

其の他、煙草專賣業の功勞者、江副造廉。ビオフェルミンの製造家、百崎俊雄。御國化粧品の、伊藤榮。海運業の、河內研太郎。三井重役、高洲鐵一郎。日本銀行調査部長、濱純一等があり、縣下では鑛業界の、高取伊好。伊丹彌太郎、深川榮左衛門、石川又八、酒田柿右衛門、野中萬太郎等がある。

三、体育家

近年國家は國民の保健、体育を極めて重視し、諸種の政策をなしつゝある。而してその對策として國民の保健を目的とする更生省の新設となり非常時局克服の一大要素たる國民の保健、体育の向上に萬全を期することゝなつた。產業の發達、國防の充實、その他國力の增進上、國民の强健なる身体を必要とすることは今更贅言を要しないことである。又皇紀二千六百年を期して國際オリンピック競技大會が我が帝都に於て開催されることになつてゐるが、これこそ我が体育運動界の實力と光輝ある日本精神とを發輝するに最も絕好なる會である。今や支那戰線における我が皇軍の活躍は、世界戰史上空前の大戰果を收め、堂々正義日本の姿を示して、全世界の人類を驚歎せしめてゐる。此の力！此の意氣！此の努力をもつて來たる東京大會には皇軍の活躍に勝るとも劣らぬ体育日本の姿を全人類の前に示したいものだ。

惜しい哉、我が佐賀縣には未だ天下に誇るべき体育家を見ないのは甚だ遺憾なことである。願くは武の國、佐賀の姿を体育界にも顯現して欲しい。現在体育家として知られてゐる人は、劍道家、大麻勇次、柔道家、馬場壽吉。前回オリンピック選手の增富選手（レスリング）、平島選手（女子陸上）等である。

以上は各方面に於ける葉隱人士として、已に著名な鄉土の先輩諸氏を擧げたつもりであるが、列擧に漏らした名士も多々あるであらう。又無名の葉隱人士として偉大な人々も多々あることを、吾々は忘れるものではない。此等偉大な葉隱先輩諸氏の後繼者たらんとして、幾多の縣人が各自の持場に精進しつゝある。未來の偉大な葉隱人士を育むもの、それは佐賀縣敎育の第一線に任を奉ずる吾々である。吾々の任の重大なるを痛感せざるを得ない。葉隱敎師たることを誓つて精進しよう。

◉編輯後記

本書は[illegible]研究も稀薄、その實踐も偏向の嫌なしとせぬ。併し吾人自身未だ研究と反省の途上にあるもの、せめて本書により教育上小波紋を抽出し、葉隱と教育研究に点火するを得ば幸である。讀者諸賢の御垂教を乞ひ、更に深き研究を待望してやまぬ。

最初、出[illegible]元の佳節をトしての豫定であつたが、さて原稿を締切つて見ると各人間連絡[illegible]一と意見の相違する点あるを發見し、更[illegible]の結果一旦出來上つた原稿を斷[illegible]に出來たのが此の原稿である。

[illegible]多の障害に逢着し、當初の手筈[illegible]客に於て五十餘頁の增加とな[illegible]延の餘議なきに至つた事に對して御諒察を乞ふ。

何しろ三十有餘名の合著……首尾一貫せず校正、裝釘等不滿足の點多し。併し卒業を目睫に控へ時間なき上、吾人、出版には全くの素人之等不備の點は大方の宥恕を乞ふ次第である。

然るに本書各論中に引用せる葉隱原文中時日切迫の爲、栗原先生の御意見を伺ひ得ざりし爲と、校正不十分の爲、誤記、誤解の點あるを恐る。然りとすれば山本常朝先生にも相濟まぬ事之全く筆者の責任にして、深く恐縮の意を表す

終りに臨んで自序にも記した如く小山知事閣下、嘉村閣下枷川部長殿栗原先生、校長先生、華岡先生並に本庄校の好意に謹んで拜謝の意を表すると共に研究部員の總動員的努力、特に、『東、伊藤、福田、古賀甫、杉谷、宮崎』の編輯委員の四ヶ月に渉り、學業の寸暇を惜んでの献身的迫熱的御盡力、並に、江口、平川、平野諸氏の御支援の勞に對して特に記して深謝の意

◉編輯後記

本書は學的研究も稀薄、その實踐も偏向の嫌なしとせぬ。併し吾人自身未だ研究と反省の途上にあるもの、せめて本書により教育上小波紋を抽出し、葉隱と教育研究に点火するを得ば幸である。讀者諸賢の御垂教を乞ひ、更に深き研究を待望してやまぬ。

最初、出版は紀元の佳節を卜しての豫定であつたが、さて原稿を締切つて見ると各人間連絡の不統一と意見の相違する点あるを發見し、更に共同研究討議の結果一旦出來上つた原稿を斷然廢棄し、新に出來たのが此の原稿である。斯く豫期せぬ幾多の障害に逢着し、當初の手筈に齟齬を來し、內容に於て五十餘頁の增加となり、出版期日遲延の餘議なきに至つた事に對して御諒察を乞ふ。

何しろ三十有餘名の合著……首尾一貫せず校正、裝釘等不滿足の點多し。併し卒業を目睫に控へ時間なき上、吾人、出版には全くの素人之等不備の點は大方の宥恕を乞ふ次第である。

然るに本書各論中に引用せる葉隱原文中時日切迫の爲、栗原先生の御意見を伺ひ得ざりし爲と、校正不十分の爲、誤記、誤解の點あるを恐る。然りとすれば山本常朝先生にも相濟まぬ事之全く筆者の責任にして、深く恐縮の意を表す

終りに臨んで自序にも記した如く小山知事閣下、嘉村閣下栁川部長殿栗原先生、校長先生、華岡先生並に本庄校の好意に謹んで拜謝の意を表すると共に研究部員の總動員的努力、特に、『東、伊藤、福田、古賀甫、杉谷、宮崎』の編輯委員の四ヶ月に涉り、學業の寸暇を惜んでの献身的迫熱的御盡力、並に、江口、平川、平野諸氏の御支援の勞に對して特に記して深謝の意

[illegible]所副島一郎氏の義侠的好意と所[illegible]文字通りの決死的作業によつて出[illegible]し得た事を明記して深く謝意を表する[illegible]す。

昭和十三年三月
皇軍大黄河を渉つて
日章旗翻る日
（委員　杉谷）

隱研究同人……（五十音順）

東良雄	岡隆次	鶴義男
石井忠勇	緒方徹	鶴田行信
伊藤一男	蒲原密雄	富田正大
稲永豊馬	川原友次郎	長迫英一
今村常夫	北川浩	中原一夫
植木武	古賀甫	野田梅雄
内山清	古賀日出男	平川潜
江頭孝男	城信	平野新一
江口高治	杉谷船雄	福島末雄
福田文治	藤井末治	吉田美男
松本熊雄	水田正巳	吉川英文
宮崎治六	溝上績	脇山次夫

昭和十三年三月十五日　印刷
昭和十三年三月十五日　發行

（非賣品）

編輯兼發行所　佐賀縣師範學校專攻科葉隱研究會
責任者　杉谷船雄
佐賀市松原町二六
印刷所　副島印刷所
電話二六八番
印刷者　副島一郎

を表します。

更に副島印刷所副島一郎氏の義俠的好意と所員の晝夜兼行文字通りの決死的作業によつて出版を全うし得た事を明記して深く謝意を表する次第であります。

昭和十三年三月
皇軍大黄河を渉つて
日章旗翻る日
（委員　杉谷）

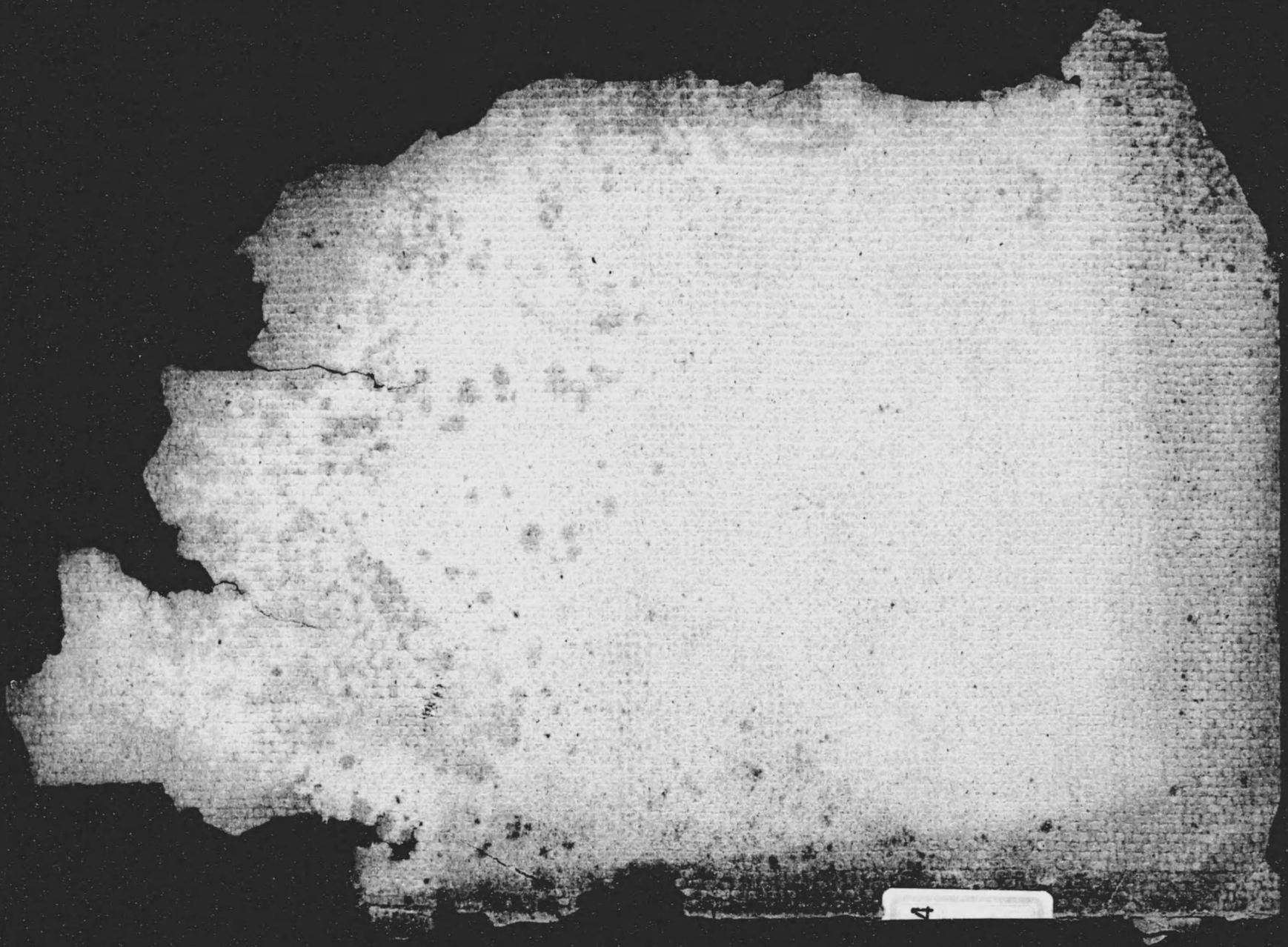
◆葉隱研究同人……（五十音順）

東良雄　岡崎隆次　鶴田義男　福田文治
石井忠勇　緒方徹　藤井末治
伊藤一男　蒲原密雄　富田正大　松本熊雄
稲永豊馬　川原友次郎　長迫英一　水田正巳
今村常夫　北川浩　中原一夫　溝上績
植松武　古賀甫　野田梅雄　宮崎治六
内山清　古賀日出男　平川潜　吉川英文
江頭正男　城信　平野新一　吉田美男
江口高治　杉谷船雄　福島末雄　脇山次夫

昭和十三年三月十五日　印刷
昭和十三年三月廿五日　發行

（非賣品）

編輯兼發行所　佐賀縣師範學校專攻科葉隱研究會
責任者　杉谷船雄
佐賀市松原町二六

印刷所　副島印刷所
電話二六八番

印刷者　副島一郎